

## 本の壁

文学部 伊 藤 光 雅



高校を卒業するまでは、自分が「本好き」だと思っていました。オープンキャンパスで図書館を見学したときは、壁のように延々とそびえる書架に感激して、それを理由に大学を選んだくらいです。

大学に入ってから、自分が実は「本好き」でもなんでもなかったことが分かりました。それまではごく簡単な一般向けの本を通り一遍読んで、物を知ったつもりになっていました。しかし授業では、本当に勉強するというのは、難解な専門書をいくつも読んで、内容を吟味しながら自分の考えを構築していくことだ、と繰り返し言われます。将来研究者になることを夢見ていた私にとっては非常に重い話で、本を読むたびに「ああ、この一冊で終わってちゃ駄目なのか・・・」という妙なあせりが生じるようになって、おかげで一時期、読書が精神的に負担でした。70万冊近いという本がまさに壁のように威圧的に感じられました。

本当の「本好き」ならこの上ない喜びを感じるはずなのに、私は嫌になってしまい、似非「本好き」だったのをはっきり認識させられました。アイデンティティーを碎かれた気がして、あらゆる分野の本から遠ざかってしまいました。

これほど本があるのに、実にもったいない話ですが、やっとそう思えるようになったのは3年の秋です。ちょうど大学院進学を意識し始めて、「研究は大変だから、すべての本を学問として読めるわけないんだ」という覚悟と心構えができたのかもしれません。以来、専攻関係の本とは時間をかけて、腰をすえて付き合う気になったし、他の本もわりと気楽に読めるようになりました。

しばらく活字離れていたせいで、多少読解力は落ちましたが、それでも読書に対するあせりが消えて、今は壁のような本ともリラックスして向き合えます。このぶんなら、研究者を目指す中で、本当の「本好き」になれるかもしれません。

## タイの図書館から学んだこと

国際コミュニケーション学部 堀 田 綾 奈



私はタイのピサヌローク県にある国立ナレースワン大学に一年間留学した。図書館は二階建てで、一階部分は本屋と食堂と本のコピー屋になっていた。ピサヌローク県はバンコクとチェンマイのちょうど真ん中に位置し、タイで最も暑い県であった。そのため冷房のかかった図書館は絶好の避暑地でもあったので、よく利用した。朝の授業が始まるまで過ごし、昼ご飯を食べ、授業が終わったらまた図書館で友達と待ちあわせをした。私の平日は大体こんな風に図書館中心だった。かばんは借りた本や複写した資料で常に重かった。毎日図書館の周りを何往復もしていたような気がする。

2、3ヶ月もすると色々な人と顔見知りになり、だんだんと会話もするようになった。食堂のおばちゃん、コピー屋のお姉さん、図書館の入り口で本が盗まれないようにチェックしているおばさん、本屋のお姉さん、いつも来ている学生…。大変お世話になった。こんなに人の輪が広がるなんてとても幸せなことだと思った。たくさん本と出会えたうえ、多くの人にも知り合うことができた。こういう図書館って魅力的だなと思う。

図書館とは、ドキドキする場所である。興味のある著作を探して動き回り、また特別探したい書物が無くても、本棚の間を歩けばたちまち興味のある著作が現れ、すぐ立ち止まって読んでしまう。日本に帰って来た今でも大切な場所である。図書を読めば、新しい何かが分かり、それがまた何かをするきっかけになったりする。チャンスがたくさん詰ったところなのだと思う。また、資料との対話だけでなく、人との交流の場ともなるべきなのだと思う。書籍を通して新しい出会いが生まれる。そんな素敵な場所、図書館の利用をお勧めします。